

7. 平田篤胤と山崎長右衛門

森田 三男

ひらたあつたね

平田篤胤は、江戸時代後期（1776〜1843）の人、国学者として有名です。現在の秋田県に生まれ、20歳の時江戸に出て、66歳で秋田に戻り、68歳で亡くなりました。越谷とも縁が深く、越ヶ谷の商人山崎長右衛門は篤胤を経済的に支援しました。また、篤胤の

三人目の奥さんは越谷出身の人です。（お里勢さん。越ヶ谷の豆腐屋の娘。篤胤との婚姻にあたり、長右衛門の養女という形をとった。）

江戸時代、国学の四大人と呼ばれたのは、次の人たちです。

平田篤胤も、その一人です。

かだのあずまろ かものまぶち もとおりのりなが ひらたあつたね
荷田春満―賀茂真淵―本居宣長―平田篤胤



平田篤胤像

あぶらちよう
「油長」山崎長右衛門篤利

山崎篤利は、武州越ヶ谷の人、「油長」の名で通っている山崎家13代目当主です。初の名は美利、家を継いで長右衛門と改めました。粕壁町の旧家山口萬蔵の2男で、山崎家に養子に入りました。

篤利は若い時から敬神の念が深く、51歳の時、「気吹屋」（篤胤が開いた家塾）に入門しました。商用で江戸に出た際には気吹屋にも立ち寄り、篤胤に面接して口授を受けました。だんだん平田学に熱中して、師の名から「篤」の一字を頂戴し、「篤利」と改名しました。

この頃、篤胤は著述を刷り出す（刊行する）費用が無いことに困っておりました。そこで篤利は資金を出して、刷板を援助することにしたのです。山崎家には、文政元年正月10日の日付で、296両という大金の借用証文が今も残っています。『古史成文』と『古史徴』出版の費用として、篤胤に貸したものです。このようにして、山崎篤利は篤胤を経済面で支えるスポンサーになったのです。

この後、山崎家と平田家との間には、師弟関係以上の関係が結ばれました。養女りよ（お里勢）と篤胤との婚姻による、姻戚関係です。この婚姻のあと、篤胤は、たびたび越ヶ谷を訪れ、油長へ泊って行きました。山崎家の言い伝えでは、街道寄りの土蔵の2階に起居したそうです。明治の大火で大方焼失しましたが、この土蔵は助かっています。この土蔵は、越ヶ谷にとって大切な篤胤記念物です。

山崎家には、他にも貴重な“篤胤遺物”が保存されています。本居宣長の画像です。これには次の讚を篤胤が書いています。

こは我が師鈴屋大人の肖像にみづから書きそへられし歌なるを、
今この御像を山崎篤利に譲るとて、おのれかきて與ふるに
石上古こと問はすしるしとて

ゆづる御像は千代といつかね

平篤胤



かぐう

平田篤胤仮寓跡

（久伊豆神社内）

篤胤は越ヶ谷を、しばしば訪れている。仮寓とは仮住まいのこと。



あぶらちよううちくら

油長内蔵（旧日光街道）

山崎長右衛門が経営した商家の土蔵。現在は、まちづくり相談処、寄合処として活用されている。